

# 第2章 都民の歯と口の健康づくりの推進

2

都民の歯と口の健康づくりの推進

## 1 ライフステージに応じた歯と口の健康づくりの推進

### (1) 乳幼児期（0歳～5歳（就学前））

#### 乳幼児期 0～5歳（就学前）



#### ① 特徴

- 生後5～6か月ごろから離乳が始まります。成長に応じた離乳食の摂取は、口腔機能の発達に重要です。
- 乳歯※は生後6～8か月ごろに生え始めます。歯が生えた直後はエナメル質※が未成熟で歯が弱く、むし歯（う蝕）になりやすい時期です。その後、成熟して歯が強くなっていき、2歳半～3歳ごろに上下10本ずつ、合計20本の乳歯が生え揃います。
- 乳歯が生え揃うまでは、噛み合わせが不安定でうまく噛めないことがあります。乳歯は永久歯※に比べて、エナメル質が薄く、歯の膨らみや歯と歯肉の境目付近のくびれが大きいといった特徴があります。
- そのため、噛み合わせの面の溝の形も複雑で、汚れがたまり、むし歯（う蝕）になりやすい傾向にあります。
- また、哺乳習慣が継続している子供は、上の前歯の裏側がむし歯（う蝕）になるリスクが高くなります。
- 5～6歳ごろ、前歯が乳歯から永久歯へと生え変わりが始まります。また、永久歯である6歳臼歯※も生え始めます。
- 乳幼児期は、保護者による仕上げみがき※や口の中の観察などがとても大切な時期です。

## ② 現状と課題

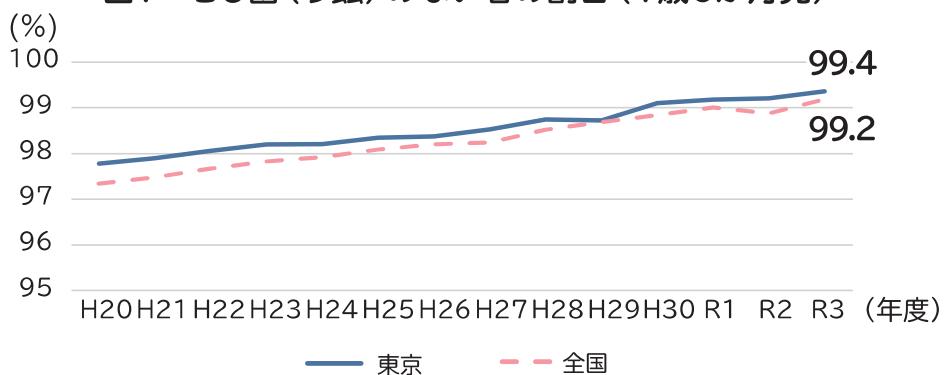
### ア 口腔の状況

#### ● むし歯（う蝕）の状況

- 1歳6か月児、3歳児とも、それぞれ図1、図2のとおり、むし歯（う蝕）のない子供の割合は増え続けており、全国平均よりも高くなっていますが、引き続き、むし歯（う蝕）の予防を徹底していく必要があります。
- 4本以上のむし歯（う蝕）のある3歳児の割合は1.33%です。（出典：東京都「東京の歯科保健」（令和5（2023）年度））
- 多数のむし歯（う蝕）がある場合は、育児環境に問題があることも考えられます。歯科医師や歯科衛生士は、保健師などと連携し、児童虐待やデンタルネグレクト※などの視点を持ちながら支援を行っていく必要があります。

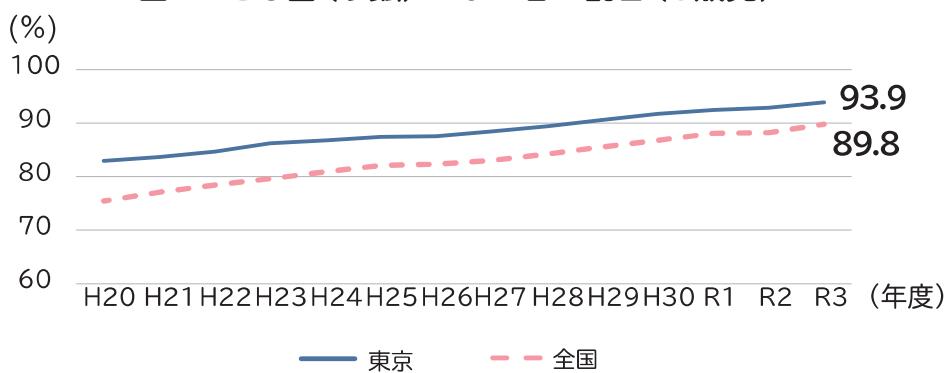


図1 むし歯（う蝕）のない者の割合（1歳6か月児）



資料：厚生労働省「母子保健課調べ（H25まで）」、「地域保健・健康増進事業報告（H26から）」  
H22 全国 岩手県、宮城県、福島県については、盛岡市・仙台市・郡山市・いわき市のみ

図2 むし歯（う蝕）のない者の割合（3歳児）

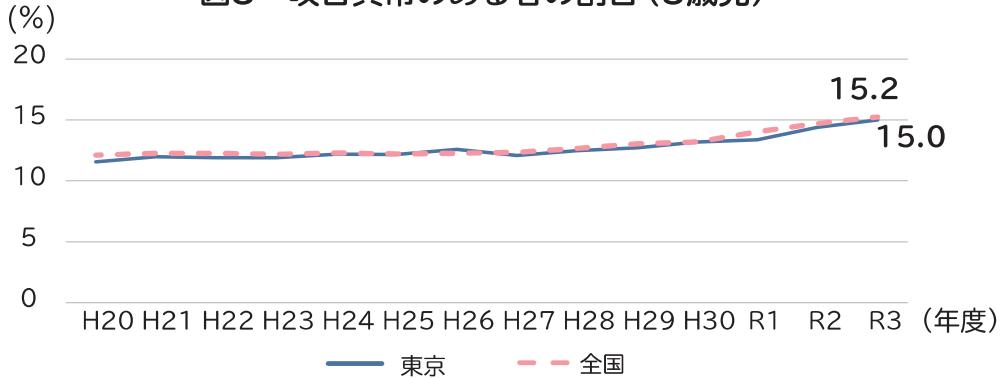


資料：厚生労働省「母子保健課調べ（H25まで）」、「地域保健・健康増進事業報告（H26から）」  
H22 全国 岩手県、宮城県、福島県については、盛岡市・仙台市・郡山市・いわき市のみ

## ● 口腔機能の状況

- 指しやぶりが続いたり強く吸い続けたりする場合や、爪や唇を噛んだり舌を上下の歯の間から出す癖がある場合、唇を閉じずに口呼吸をしている場合などは、歯並びや噛み合わせに影響することがあります。
- 咬合異常のある3歳児の割合は、図3のとおり増加傾向です。口腔機能の発達不全により、口の周りの筋肉が弱くなり、食べ物をうまく食べることができなくなる可能性もあるなど、乳幼児期の発達の状況は、生涯にわたって口腔機能に影響を与えます。
- 平成30（2018）年4月から、口腔機能発達不全症※と診断された15歳未満の者に対する治療について医療保険が適用されており、令和4（2022）年4月には、その対象年齢が18歳未満に拡大されています。
- 口腔機能発達不全症の一つである口唇閉鎖不全症※は、令和3（2021）年に発表された全国的な疫学調査（日本における発達期小児の口唇閉鎖不全の有病率：横断的大規模アンケート調査）の結果によると、3歳から12歳の30.7%に見られ、年齢が上がると増加する傾向があることが示されています。
- 歯並びや噛み合わせについては保護者から歯科診療所や保健センター等への相談も多く、不安を解消するための相談対応や支援の充実が必要です。

図3 咬合異常のある者の割合（3歳児）



資料：厚生労働省「母子保健課調べ（H25まで）」、「地域保健・健康増進事業報告（H26から）」  
H22 全国 岩手県、宮城県、福島県については、盛岡市・仙台市・郡山市・いわき市のみ

## イ 保健行動

### ● フッ化物の応用

- むし歯（う蝕）の予防には、フッ化物※が有効です。方法としては、フッ化物歯面塗布、フッ化物配合歯磨剤※の使用、フッ化物洗口※などがあります。
- フッ化物は、エナメル質に取り込まれて歯を強化する働きがあります。保護者が適切な



歯みがきの方法を理解し、フッ化物配合歯磨剤を幼児期から継続的に使用することで、むし歯（う蝕）予防に高い効果を得ることができます。

- フッ化物配合歯磨剤については、令和5（2023）年4月に、「う蝕予防のためのフッ化物配合歯磨剤の推奨される利用方法【普及版】」が国から周知され、新たに推奨される使用量やフッ化物濃度が示されています。
- フッ化物配合歯磨剤の日本における市場占有率は令和4（2022）年では92.8%でした（日本歯磨工業会2022年度（1月～12月）歯磨出荷・輸出入統計）。
- むし歯（う蝕）の予防には、奥歯の噛み合わせの面にシーラント※をすることも効果的です。
- 幼児期の子供に対してフッ化物配合歯磨剤を使用していると回答した保護者の割合は、表1のとおり年々増加しています。今後、更に増えていくよう、歯科健診や歯科医療機関での普及啓発を進めていく必要があります。

表1 フッ化物配合歯磨剤を使用していると回答した保護者の割合

年齢	平成11年度	平成16年度	平成21年度	平成26年度	令和4年度
3歳	30.2%	50.6%	55.1%	66.8%	82.3%
5歳	42.3%	59.7%	66.9%	73.9%	84.5%

資料：東京都「幼児期・学齢期の歯科保健行動に関する調査」

## ● 甘味摂取の状況

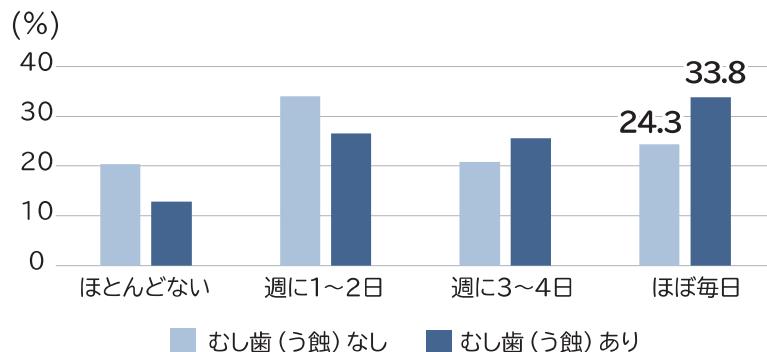
- むし歯（う蝕）予防として、砂糖（スクロース）の摂取をコントロールすることも有効な手段です。
- 具体的には、甘いお菓子と甘味飲料と一緒に与えない、おやつは1日2回程度、時間と量を決めて食べるなどがあります。
- 哺乳瓶で甘味飲料（イオン飲料にも砂糖が入っています。）を与えると、口の中に砂糖が長い時間とどまることになり、むし歯（う蝕）になりやすくなります。また、これらの飲料には酸も含まれていることが多く、酸によって歯が溶けやすくなります。
- 甘味飲料をほぼ毎日飲む者（3歳児）の割合は、表2のとおり平成26（2014）年と令和4（2022）年ではほぼ横ばいです。甘味飲料をほぼ毎日飲む者（3歳児）で、むし歯（う蝕）がある者の割合は、図4のとおり33.8%、むし歯（う蝕）がない者（3歳児）では24.3%であり、10ポイント近く差があります。
- 学齢期になると、保護者が間食をコントロールしにくくなるため、乳幼児期から間食内容を工夫し、時間を決めて飲食する習慣をつける必要があります。

表2 ほぼ毎日、甘味飲料を摂取している者の割合

年齢	平成11年度	平成16年度	平成21年度	平成26年度	令和4年度
1歳6か月	37.4%	29.6%	20.4%	16.8%	14.4%
3歳	36.6%	33.3%	27.6%	26.0%	25.0%
5歳	23.9%	26.4%	22.6%	22.8%	21.3%

資料：東京都「幼児期・学齢期の歯科保健行動に関する調査」

図4 むし歯（う蝕）の有無と甘味飲料の摂取状況（3歳児）



資料：東京都「幼児期・学齢期の歯科保健行動に関する調査」（令和4年度）

## ● 口腔観察

- 保護者による仕上げみがきは、歯と口を清潔に保つ習慣を身につけること、保護者が口の中をチェックすることで、むし歯（う蝕）や口の中の変化に早期に気付くことができること、歯と口への関心が高まることなどの効果が期待できます。
- 乳歯が生え揃ったら、歯みがきの習慣づけのために、保護者の仕上げみがきと合わせて、子供の自分みがきも始めます。
- 週に1回以上、子供の歯や口の中を観察している保護者の割合は、表3のとおり、平成26（2014）年度と比較して、令和4（2022）年度では、1歳6か月児が3.5ポイント、3歳児が2.1ポイント、5歳児が4.8ポイント増加しています。
- 日常的に、仕上げみがきのときに歯や口の中を観察し、噛み合わせの溝や歯と歯の間、歯と歯肉の境目等のみがき残しや白い汚れなどをチェックすることが、口の中の変化に早期に気づき、むし歯（う蝕）予防や発見につながるため、歯科健診等の機会を通じて啓発していくことが必要です。



表3 週に1回以上、子供の歯や口腔の観察をしている保護者の割合

年齢	平成11年度	平成16年度	平成21年度	平成26年度	令和4年度
1歳6か月	75.3%	77.6%	80.6%	79.1%	82.6%
3歳	75.7%	80.0%	80.4%	81.2%	83.3%
5歳	67.5%	69.6%	74.9%	79.3%	84.1%

資料：東京都「幼児期・学齢期の歯科保健行動に関する調査」

## ● よく噛む習慣

- 乳幼児期は、口腔機能を獲得するための大切な時期になります。口を閉じてよく噛んで食べることは、舌や口の周りの筋肉の発達、歯並びや噛み合わせの育成を促すとともに、健全な口腔機能の獲得や発達につながります。
- ゆっくりよく噛んで食べる習慣づけをしている者の割合は、表4のとおり平成26(2014)年度と比較して、令和4(2022)年度では、3歳児が1.8ポイント、5歳児が3.2ポイント増加しています。
- 生涯にわたって、おいしく何でも食べられる機能を維持するためには、ゆっくりよく噛んで食べることなどによって育まれる乳幼児期の口腔機能の健全な発達が重要であることを啓発していく必要があります。

表4 ゆっくりよく噛んで食べる習慣づけをしている者の割合

年齢	平成21年度	平成26年度	令和4年度
3歳	60.4%	59.4%	61.2%
5歳	54.6%	52.8%	56.0%

資料：東京都「幼児期・学齢期の歯科保健行動に関する調査」

## ③ 取組の方向性

- 区市町村が実施する歯科健診等を通じ、乳歯の特徴の理解や仕上げみがき、口の中の観察などの乳幼児期の取組の大切さを啓発する等、口腔機能の育成とむし歯（う蝕）予防の取組を進めています。
- むし歯（う蝕）予防として、フッ化物配合歯磨剤の効果や砂糖（スクロース）の摂り方を啓発しています。
- 多数のむし歯（う蝕）のある子供や保護者に対する必要な指導や支援は、保健、医療、福祉等の各分野の多職種が連携して実施していくことが必要です。
- 多職種向け食育講習会の実施などを通じて、乳幼児期の口腔機能の獲得は生涯を通じた口腔機能の維持につながることを啓発しています。

## ④ 指標

項目	基準値	目標値
4本以上のむし歯（う蝕）のある者の割合（3歳児）	1.33% (令和4年度)	減少
ゆっくりよく噛む習慣づけをしている者の割合（3歳児）	61.2% (令和3年度)	増加

## (2) 学齢期（6歳～17歳）

### 学齢期 6～17歳



#### ① 特徴

- 小学生の時期は、乳歯から永久歯への生えかわりの時期です。
- 5～6歳ごろ、6歳臼歯が生え、また、下の前歯から生え変わりが始まり、12歳ごろまでには乳歯が全て永久歯に生えかわります。永久歯も生えた直後は未成熟で歯が弱く、その後徐々に成熟して歯が強くなっていきます。
- 12歳ごろ、6歳臼歯の更に奥に12歳臼歯※が生え始め、14歳ごろまでに親知らず以外の永久歯が生え揃います。
- この時期は、生涯を通じた口腔ケアの習慣や生活習慣の基礎を身につける大切な時期であるとともに、歯や口は、食べる、表情をつくり話す、身体のバランスをとる等、生活をする上で重要な機能があることを学び、実感することができる大切な時期です。

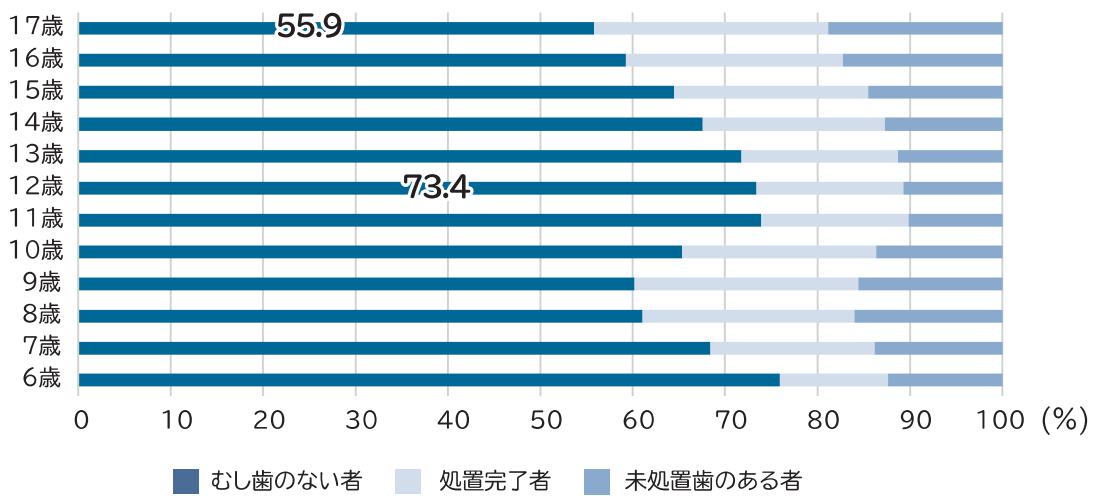
#### ② 現状と課題

##### ア 口腔の状況

###### ● むし歯（う蝕）の状況

- 6歳臼歯は奥に生えるため、みがきにくく、また、永久歯の奥歯の中では一番最初に生えることから、最もむし歯（う蝕）になりやすい歯です。
- 小学校の高学年になるにつれて、乳歯のむし歯（う蝕）が抜け、永久歯が生えてくると、一時的にむし歯（う蝕）のない児童の割合が高くなります。
- その後、永久歯が生え揃い始める12歳から17歳までの間にむし歯（う蝕）のない生徒の割合は、図5のとおり73.4%から55.9%に減少しており、永久歯が生えてから比較的短期間にむし歯（う蝕）が増加しています。
- 生え始めの永久歯は、むし歯（う蝕）になりやすいことから、いつまでも歯と口の健康を保つために、この時期にむし歯（う蝕）を予防し、口腔ケアの習慣を身につけることが必要です。

図5 むし歯(う蝕)のない者の割合



## ● 歯肉の状況

- 永久歯と乳歯が混在する混合歯列期は、歯並びも一時的に悪くなるため、清掃が難しくなります。清掃状態が悪いと歯肉に炎症が起こりやすくなります。
- 小学校から中学校、高等学校へと進学するごとに、歯肉の炎症所見のある児童・生徒の割合は、図6のとおり、それぞれ6.0ポイント、4.5ポイント高くなっています。
- 学齢期は、進学に伴うライフスタイルの変化が起こる時期であり、かつ、自ら歯と口の健康を保つための行動や生活習慣を身につける大切な時期でもあります。学齢期から歯周病予防に関する知識や歯周病と全身の健康との関係などの知識を身につけていくことが必要です。



図6 歯肉に所見のある(歯周疾患及び歯科疾患要観察者)者の割合



資料：東京都「東京都の学校保健統計書」（令和3年度）

## イ 保健行動



### ● フッ化物の応用

- 学齢期においても、むし歯（う蝕）予防には、フッ化物が有効です。フッ化物配合歯磨剤の効能を理解し、適切に使用することは、学齢期のむし歯（う蝕）予防に効果的です。
- 「フッ化物配合歯磨剤を使用している」と回答した者の割合は、表5のとおり12歳では37.2%です。また、同じ調査によると「使っている歯磨剤がフッ化物配合歯磨剤かわからない」と回答した者（12歳）は53.0%と高い割合を占めます。
- 毎日使っている歯磨剤がフッ化物配合であることを認識するとともに、歯磨剤のフッ化物濃度や使用量、歯みがき後のうがいの仕方等について理解した上で、適切に使用することができるよう啓発することが必要です。
- また、歯科医療機関で定期的に予防処置（フッ化物歯面塗布）を受けることや家庭等で定期的にフッ化物洗口を行うことも、むし歯（う蝕）予防には効果的です。

表5 フッ素入り歯磨剤を使用していると回答した者の割合

年齢	平成11年度	平成16年度	平成21年度	平成26年度	令和4年度
6歳	42.9%	60.6%	66.4%	71.8%	82.3%
9歳	14.6%	40.3%	43.3%	57.6%	44.6%
12歳	15.5%	24.1%	32.9%	29.8%	37.2%

資料：東京都「幼児期・学齢期の歯科保健行動に関する調査」  
6歳は保護者による回答、9歳及び12歳は本人による回答

### ● 甘味摂取の状況

- むし歯（う蝕）の予防には、乳幼児期と同じく、砂糖（スクロース）の摂取をコントロールすることが有効です。
- ほぼ毎日、甘味飲料を摂取している者の割合は、表6のとおり、平成26（2014）年度と比較して、令和4（2022）年度では、6歳が1.4ポイント増、9歳が2.4ポイント減、12歳では3.1ポイント減という結果でした。
- 中学生になると、生活範囲の拡大や生活時間の変化などにより、甘味飲料の摂取頻度や摂取量等も変化します。甘味飲料は、歯にとってむし歯（う蝕）のリスクになること、また、学齢期からの生活習慣病の予防といった観点からも、自らコントロールするよう周知する必要があります。

表6 ほぼ毎日、甘味飲料を摂取していると回答した者の割合

年齢	平成11年度	平成16年度	平成21年度	平成26年度	令和4年度
6歳	20.7%	24.2%	17.8%	20.4%	21.8%
9歳	21.4%	19.0%	21.3%	23.6%	21.2%
12歳	20.2%	23.4%	23.5%	27.1%	24.0%

資料：東京都「幼児期・学齢期の歯科保健行動に関する調査」  
6歳は保護者による回答、9歳及び12歳は本人による回答

## ● 口腔清掃の状況

- 乳歯と永久歯が混在する生え変わりの時期は、歯並びが複雑で清掃が難しいため、歯ブラシでの歯みがきと合わせ、必要に応じてデンタルフロス※を使用することが有効です。
- ほぼ毎日、歯を1本ずつ丁寧に時間をかけてみがいている者の割合は、表7のとおり、9歳で51.8%、12歳で63.5%となっています。
- 乳幼児期に引き続き、小学生の時期は、保護者による仕上げみがきが必要です。
- 中学生・高校生の時期には保護者等の介入が減るため、小学生のうちから適切な歯みがき習慣を身につけ、生涯にわたる生活習慣の基礎をしっかり定着させる必要があります。

表7 ほぼ毎日、歯を1本ずつ丁寧に時間をかけてみがいていると回答した者の割合

年齢	平成16年度	平成21年度	平成26年度	令和4年度
9歳	37.9%	37.5%	40.4%	51.8%
12歳	49.0%	46.8%	53.1%	63.5%

資料：東京都「幼児期・学齢期の歯科保健行動に関する調査」

## ● よく噛む習慣

- 「噛む」「飲み込む」といった口腔機能が十分に発達し、維持されることは、健全な食生活を送るための基礎であり、食育※の観点からも重要です。
- 食べるときによく噛むようにしている者（9歳）の割合は、表8のとおり67.9%であり、12歳の割合は62.2%となっています。平成26(2014)年度に比べると、令和4(2022)年度では、9歳が8.6ポイント、12歳が9.9ポイント増加しています。

表8 食べるときによく噛むようにしていると回答した者の割合

年齢	平成21年度	平成26年度	令和4年度
9歳	59.3%	59.3%	67.9%
12歳	50.0%	52.3%	62.2%

資料：東京都「幼児期・学齢期の歯科保健行動に関する調査」

## ③ 取組の方向性

- 学校歯科保健活動※等を通じ、むし歯（う蝕）や歯周病の予防に取り組むとともに、口腔機能に着目した支援や食育に関連した取組を進めます。
- むし歯（う蝕）や歯周病にかかると、治療しても再びむし歯（う蝕）や歯周病にかかるリスクが高くなることを認識し、生涯を通じた歯と口の健康を維持するために歯みがきやデンタルフロスの使用など、必要な口腔ケアの習慣や生活習慣の基礎を身につけるよう、啓発していきます。



- むし歯（う蝕）予防として、フッ化物配合歯磨剤やフッ化物歯面塗布、フッ化物洗口の効果、甘味飲料の摂り方等を啓発していきます。
- 学齢期においても、かかりつけ歯科医を持ち、定期的な歯科健診や予防処置（フッ化物歯面塗布）を受ける習慣を身につけることの大切さについて啓発していきます。

#### ④指標

項目	基準値	目標値
むし歯（う蝕）のない者の割合（12歳）	73.4% (令和3年度)	80.0%
むし歯（う蝕）のない者の割合（17歳）	55.9% (令和3年度)	60.0%
歯肉に炎症所見のある者の割合（17歳）	22.9% (令和3年度)	20.0%



### (3) 成人期（18歳～64歳）

#### 成人期 18～64歳



##### ① 特徴

- 高等学校までは学校で定期健診が行われ、学校歯科医による保健指導もありますが、卒業後はその機会も無くなり、生活も不規則になりやすいことから、歯周病が増える傾向があります。
- 歯周病は、自覚症状が乏しく、自覚症状が強くなってきたときには、既に進行している可能性が高い疾患です。また、むし歯（う蝕）を治療した歯が再びむし歯（う蝕）になる二次う蝕が多くなります。
- 青年期は、他の年代と比較して、定期的にかかりつけ歯科医を受診している者の割合が少なくなっています。
- 妊娠中は、つわりなどの体調の変化で丁寧な歯みがきが難しく、ホルモンのバランスや食生活も変化するため、歯周病やむし歯（う蝕）が進行しやすい時期です。口の中の環境が悪いと、生まれてくる赤ちゃんに影響が出ることもあります。また、出産前後は体調管理や赤ちゃんの世話などに追われ、自分の口腔ケアまで手が回らないこともあります。

##### ② 現状と課題

###### ア 口腔の状況

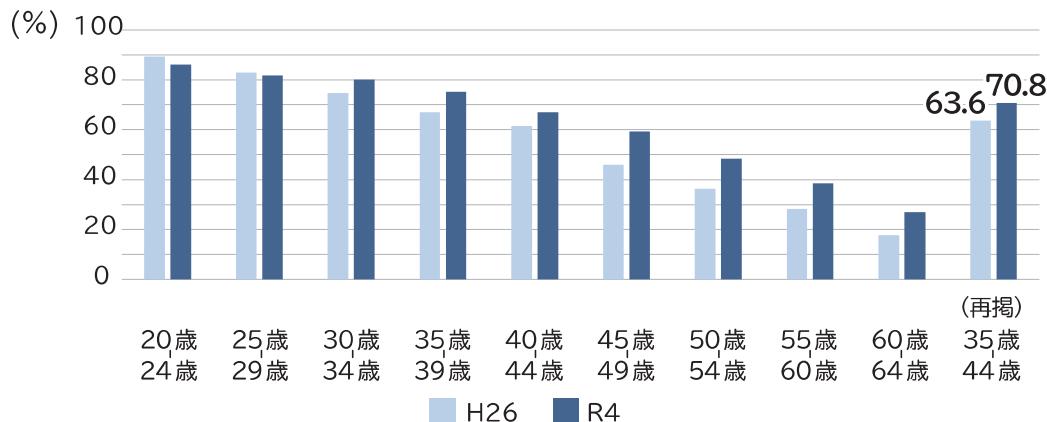
###### ● むし歯（う蝕）と歯周病の状況

- 歯を失う原因是、主にむし歯（う蝕）と歯周病です。むし歯（う蝕）を治療した歯は、二次う蝕のリスクが高くなります。また、歯周病の原因是、口の中の細菌の塊である歯垢です。歯石※の付着、喫煙、歯並び・噛み合わせが悪いことなども歯周病のリスクを高める要因です。
- 20歳代を除く各年代において、図7のとおり、平成26（2014）年度と比較して、令和4（2022）年度では、喪失歯のない者の割合は増加しており、35歳から44歳では、63.6%から70.8%となっています。
- また、現在歯数※24歯以上の者は、図8のとおり、各年代で増加しており、55歳から64歳については、平成26（2014）年度の70.0%から令和4（2022）年度の

80.3%と10.3ポイント増加しています。

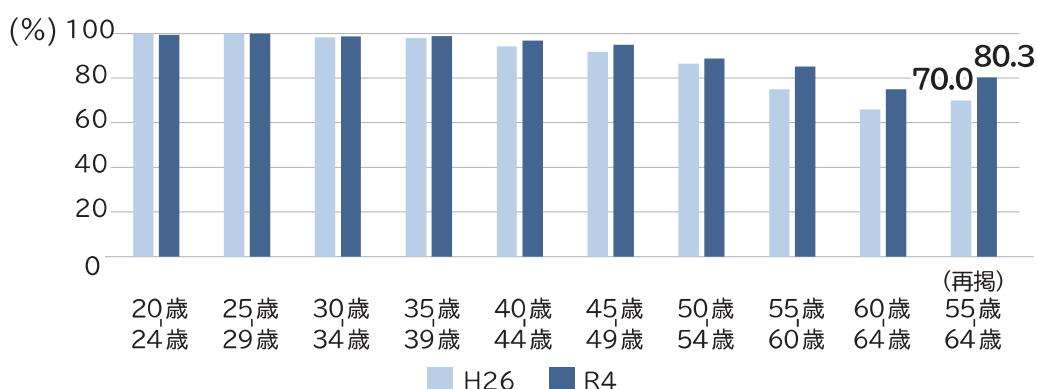
- 青年期のうち、自身の歯や口の状態について不満に感じている者の割合は65.5%で、その理由としては、歯の痛みや出血、腫れ、口臭等があげられています。(出典:東京都「青年期実態調査」(令和4(2022)年度))
- 歯を多く有する者が増えた半面、歯周ポケット<sup>\*</sup>の深さが4mm以上あり、治療等が必要な進行した歯周病を有する者の割合は増加傾向です。
- 進行した歯周病を有する者の割合(40歳~49歳)は、図9のとおり、令和4(2022)年度は43.5%であり、平成28(2016)年の40.8%と比較して、2.7ポイント悪化しています。
- 平成30(2018)年度から、特定健康診査<sup>\*</sup>の「標準的な質問票」に「かむこと」に関する項目が新たに追加されています。何でもかんで食べることができる者の割合は、図10のとおり、令和2(2020)年度では50歳~64歳で83.1%です。
- 将来、8020を達成することができるよう、青年期から口腔ケアやかかりつけ歯科医での定期的な歯科健診・予防処置を受けることの大切さを啓発していく必要があります。

図7 喪失歯のない者の割合



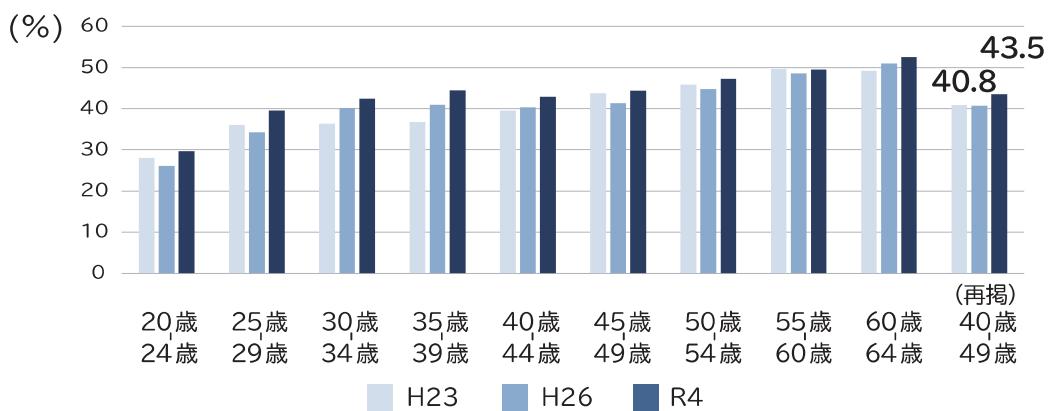
資料: 東京都「東京都歯科診療所患者調査」(令和4年度)

図8 現在歯数24歯以上の者の割合



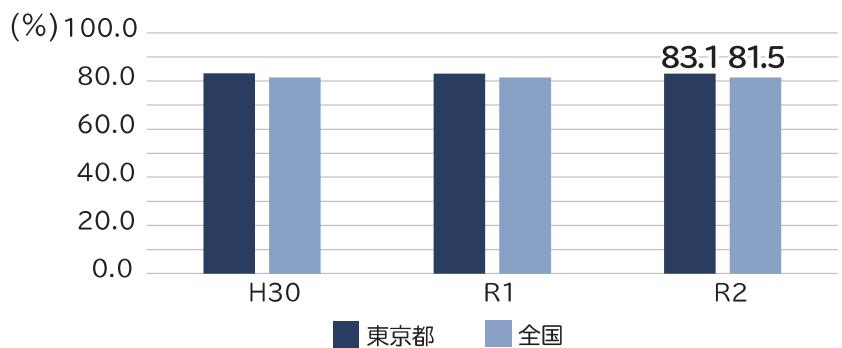
資料: 東京都「東京都歯科診療所患者調査」

図9 歯周ポケットの深さが4mm以上(進行した歯周病を有する者)の割合



資料：東京都「東京の歯科保健」

図10 何でもかんで食べることができる者の割合(50歳～64歳)



資料：厚生労働省「NDB オープンデータ（特定健診）」

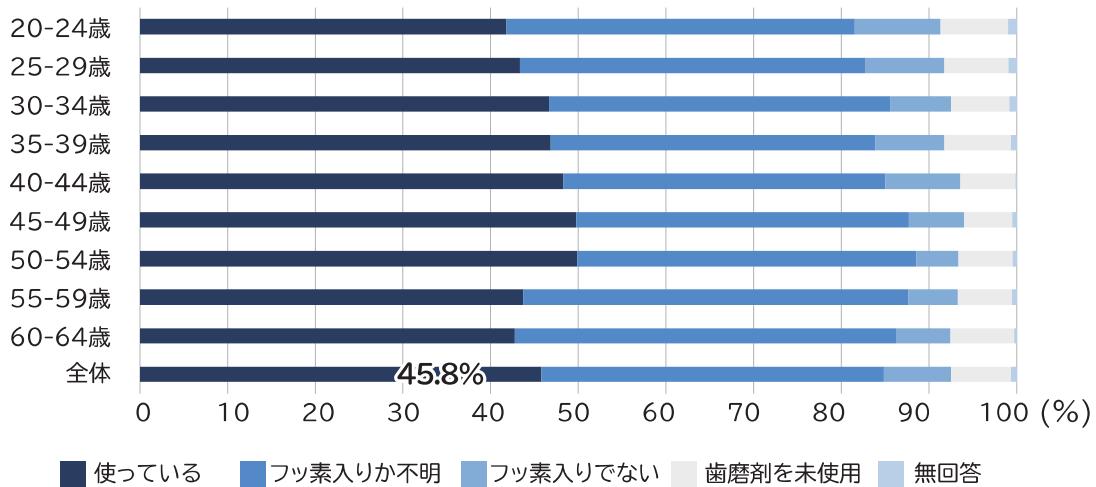
## イ 保健行動

### ● フッ化物配合歯磨剤の使用

- むし歯(う蝕)予防にはフッ化物配合歯磨剤を使うことが、成人期においても効果的です。
- フッ化物配合歯磨剤を使用していると回答した者の割合は、図11のとおり45.8%で、年代ごとでも、それぞれ4割以上となっています。フッ化物配合歯磨剤の市場占有率が9割を超えていていることから、使用している歯磨剤がフッ化物配合歯磨剤であることを認識し、適切な使用方法やその効果を理解した上で、使用することができるよう啓発していく必要があります。



図11 フッ素入り歯磨剤を使用していると回答した者の割合



資料：東京都「東京都歯科診療所患者調査」（令和4年度）

## ● 口腔清掃の状況

- 1日に10分間程度の時間かけて丁寧な歯みがきをほぼ毎日行うと回答した者の割合は、表9のとおり、平成26（2014）年度と比較して、令和4（2022）年度では、20歳～39歳までが9.0ポイント、40歳～64歳が6.2ポイント増加していました。

表9 1日に10分間程度の時間かけて丁寧な歯みがきをほぼ毎日行うと回答した者の割合

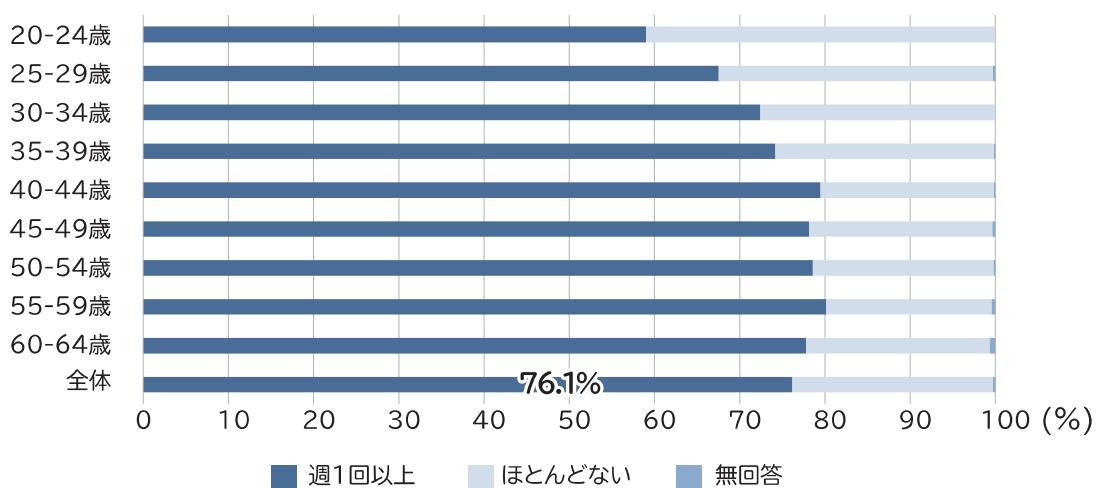
年齢	平成21年度	平成26年度	令和4年度
20歳～39歳	24.2%	23.5%	32.5%
40歳～64歳	25.2%	22.5%	28.7%

資料：東京都「東京都歯科診療所患者調査」

- 歯ブラシだけでは、歯と歯の間の歯垢を完全に落とすことができないため、歯ブラシのほかにデンタルフロスや歯間ブラシ等を使用します。
- 週1回以上デンタルフロスや歯間ブラシなどを使用していると回答した者の割合は、図12のとおり20～24歳で6割弱、その他の年代では、概ね7割から8割という状況です。
- 歯ブラシの使用に加えて、日常的にデンタルフロスや歯間ブラシを適切に使うことについて、啓発していく必要があります。



**図12 デンタルフロスや歯間ブラシを使用していると回答した者の割合**

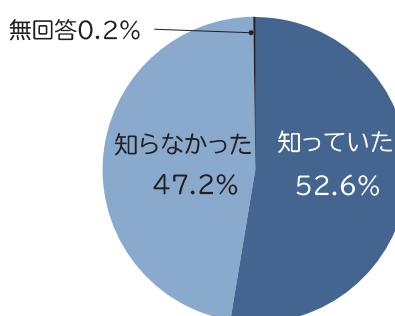


資料：東京都「東京都歯科診療所患者調査」（令和4年度）

### ● 歯と口の健康と全身の健康の関係に関する知識

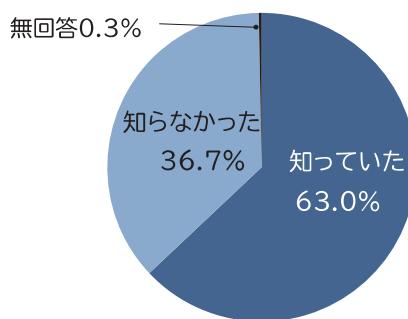
- 歯周病は糖尿病や心疾患、脳梗塞、早産※・低体重児※出産など、全身の健康と深い関わりがあります。
- 糖尿病と歯周病の関係を知っていると回答した者の割合は、図13のとおり5割程度、喫煙と歯周病の関係を知っていると回答した者の割合は、図14のとおり6割程度に留まっています。
- 糖尿病と喫煙は歯周病を悪化させる要因であることなど、歯と口の健康と全身の健康との関係について、多くの都民が理解し、自ら口腔ケア等に取り組むことが必要です。
- また、歯や義歯※、舌などを清潔にすることが誤嚥性肺炎※や抗がん剤治療時の合併症の発症を予防するなど、口腔ケアと肺炎やがん治療との関係等について、都民に知っておいてほしい知識があります。
- 自ら行う口腔ケアとともに、かかりつけ歯科医での口腔衛生管理を受け、口の中を清潔に保つことが、歯と口の健康だけでなく全身の健康に寄与することを啓発していく必要があります。

**図13 糖尿病と歯周病の関係を知っていると回答した者の割合（20歳～64歳）**



資料：東京都「東京都歯科診療所患者調査」（令和4年度）

図14 喫煙と歯周病の関係を知っていると回答した者の割合（20歳～64歳）



資料：東京都「東京都歯科診療所患者調査」（令和4年度）

### ③ 取組の方向性

- 歯を失う原因となるむし歯（う蝕）や歯周病の予防に向けて、口腔ケアに関する知識や歯周病予防の大切さ、かかりつけ歯科医を持ち定期的に受診することの意義等について、普及啓発を実施していきます。
- 特に青年期については、かかりつけ歯科医を持つ割合が他の年代と比較して少ないこと等も踏まえ、本人だけでなく、学校や企業側に対しても、定期的に学生や従業員が歯科健診を受けることの重要性を働きかけるなど、それぞれの意識や行動変容を促すことにより、社会全体での歯と口の健康づくりの推進に向けて機運を醸成していきます。
- 区市町村が実施する歯周疾患検診をはじめとする成人歯科健診により、歯科疾患の早期発見・早期治療につなげるとともに、かかりつけ歯科医での定期的な歯科健診や予防処置への動機づけを行っていきます。
- 糖尿病や喫煙、心疾患、脳梗塞、早産・低体重児出産など、全身の健康と歯周病との深い関わりや口腔ケアの重要性について、都民の認知度を高め、都民自ら口腔ケアに取り組むよう、普及啓発を実施していきます。
- 妊産婦歯科健康診査などを通じて、妊産婦に対し、歯科保健に関する知識を高め、かかりつけ歯科医での定期的な予防処置への動機づけを行っていきます。

### ④ 指標

項目	基準値	目標値
喪失歯のない者の割合（35歳～44歳）	70.8% (令和4年度)	75.0%
進行した歯周病を有する者の割合（40歳～49歳）	43.5% (令和3年度)	35.0%
何でもかんで食べることができる者の割合（50歳～64歳）	83.1% (令和2年度)	増加

## (4) 高齢期（65歳以上）

### 高齢期 65歳～



#### ① 特徴

- 高齢期になると、歯の喪失が著しくなってきます。65歳で平均23.8本、80歳で平均15.6本の歯を有しており、65歳では平均4.2本、80歳では平均12.4本の歯を失っていることになります。（出典：厚生労働省「歯科疾患実態調査」（令和4（2022）年））
- 加齢とともに歯肉が下がってくことで、露出した歯の根のむし歯（根面う蝕※）が多くなります。
- 加齢や服用薬の副作用によりだ液が減少すると、むし歯（う蝕）や歯周病が増加し、食事や会話にも影響します。
- 加齢や脳卒中等の疾患により、味覚障害や嚥下障害※などの機能障害が起こってきます。
- 口腔機能が低下すると、柔らかくあまり咀嚼※しないで食べることができる食品を摂取することが多くなるため、たんぱく質・ビタミン・食物繊維といった栄養素の摂取が減少し、反対に炭水化物・菓子類・砂糖などの摂取割合が増えます。食事のバランスが悪くなり、食事の量も減少し、体重や筋肉量を維持することも困難になってきます。また、むせや咳、誤嚥※が起こりやすくなり、誤嚥性肺炎のリスクが増します。
- 歯を抜けたままにしておくと噛む力が低下するだけでなく、噛み合わせにも影響するため、義歯などで機能回復を図るとともに、更なる歯の喪失のリスクを減らすことが必要となります。また、義歯を日ごろから手入れし、かかりつけ歯科医による定期的なチェックを行うことで、よく噛むことができ、発音がはっきりするなど、日常生活が豊かになります。
- 滑舌低下、食べこぼし、わずかなむせ、噛めない食品が増えるなどの口腔機能の衰え（オーラルフレイル※）に早めに気づき、対処することが大切です。口腔機能の衰え（オーラルフレイル）は、身体の衰え（フレイル※）と大きく関わっています。
- 身体機能を維持し、食べる、話す、笑うといった口の機能を十分に使うことと、口腔ケアを続けることが大切であり、フレイル予防につながります。

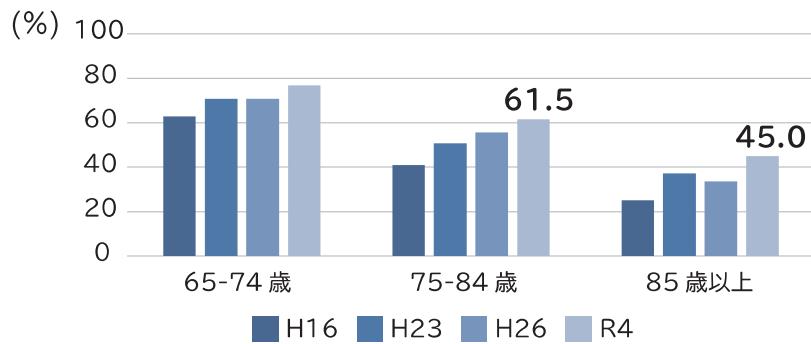
## ② 現状と課題

### ア 口腔の状況

#### ● 現在歯とむし歯（う蝕）、歯周病の状況

- むし歯（う蝕）や歯周病は、歯の喪失のリスクを高めます。また、高齢期には、歯肉が痩せたり、口が渴いたりするというようなことからも、むし歯（う蝕）や歯周病のリスクが高くなっています。
- 8020 を達成した者（75 歳～84 歳）の割合は、図 15 のとおり年々高くなり、令和 4（2022）年には 61.5% に達しました。なお、現在歯が 20 本以上ある 85 歳以上の者の割合は 45.0% となっています。
- 加齢や疾患などの影響で動作が思い通りにできないことで歯みがきも困難になり、清掃状態が悪化することもあるため、定期的にかかりつけ歯科医で歯石除去※や歯面清掃※などの予防処置を受けることが必要です。
- また、高齢者は、糖尿病など何らかの疾患有っていることが多いため、医科と歯科が連携して支えることが必要です。

図15 現在歯が20歯以上ある者の割合（65歳以上）

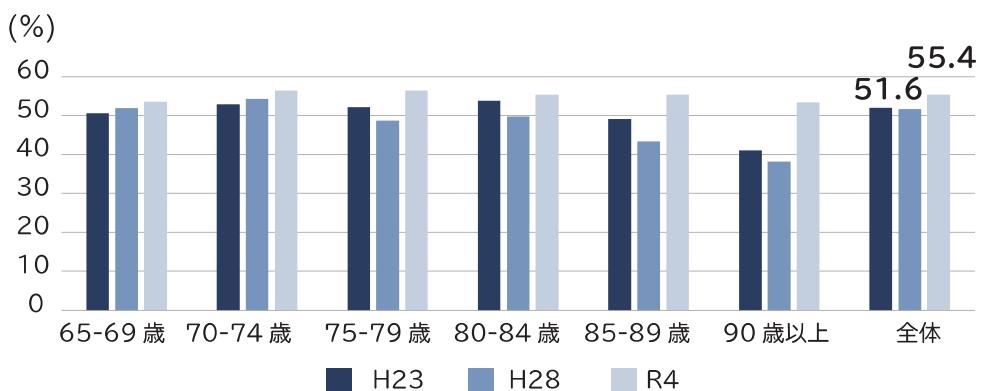


資料：東京都「東京都歯科診療所患者調査」

- 一方で、歯が残っていても歯周ポケットの深さが 4 mm 以上の進行した歯周病を有する者の割合は、図 16 のとおり、令和 4（2022）年度では、55.4% であり、平成 28（2016）年度の 51.6% と比較して悪化しており、8020 を達成していても進行した歯周病にかかっている場合もあるため、予防と重症化の防止の両面に取り組むことが必要です。



図16 歯周ポケットの深さが4mm以上(進行した歯周病を有する者)の割合

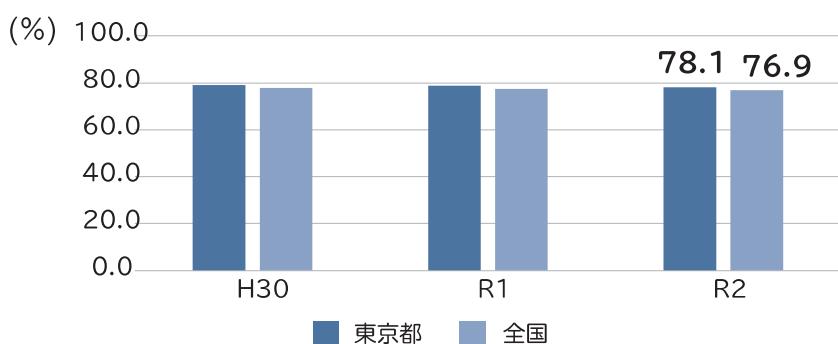


資料：東京都「東京の歯科保健」

## ● 口腔機能の状況

- おいしく安全に食べるためには、だ液分泌を促し、食べるための筋肉をトレーニングするなど、口腔機能を維持することが大切です。こうしたトレーニングなどは誤嚥性肺炎の予防にもつながります。
- 特定健康診査において、何でもかんで食べることができる者の割合は、図17のとおり、65歳～74歳では78.1%です。高齢期になっても、自分の歯や義歯でよく噛んで食べられることが、いつまでもおいしく食べ、会話を楽しみ、笑顔で人生を過ごすことにつながるということを啓発する必要があります。
- 平成30（2018）年4月から、口腔機能低下症※と診断された方に対する治療について、医療保険が適用されています。

図17 何でもかんで食べることができる者の割合(65歳～74歳)



資料：厚生労働省「NDB オープンデータ（特定健診）」

## イ 保健行動

### ● フッ化物配合歯磨剤の使用

- 高齢期において、フッ化物配合歯磨剤を使うことは、加齢とともに歯肉が下がってくることによって露出した歯の根のむし歯（根面う蝕）予防に効果的です。
- 高齢期において、フッ化物配合歯磨剤を使用している者の割合は、表 10 のとおり 38.2% であり、使っている歯磨剤がフッ素入りかどうか分からないと回答した者の割合が 42.2% です。
- フッ化物の有無を意識せずに歯磨剤を使用している方が多いと考えられるため、使用している歯磨剤がフッ化物配合歯磨剤であることを認識し、適切な使用方法やその効果を理解した上で使用することができるよう、啓発していく必要があります。

表10 フッ素入り歯磨剤を使用している者の割合

年齢	フッ素入り歯磨剤を使用	フッ素入りかどうか不明	フッ素入りでないもののを使用	歯磨剤を未使用	無回答
65 歳以上	38.2%	42.2%	7.7%	9.7%	2.2%

資料：東京都「東京都歯科診療所患者調査」（令和4年度）

### ● 口腔清掃の状況

- 高齢期になり歯肉が痩せてくると、歯と歯の隙間に食べ物が挟まりやすくなります。挟まつたままにしておくと、むし歯（う蝕）や歯周病の原因になります。
- 高齢期には口腔機能が低下するため、口の中が不衛生な状況であると、口腔内の細菌等が誤って気管に入ることにより、誤嚥性肺炎のリスクが高くなります。口の中を清潔な状態で保つことは、全身の健康にもつながります。
- 1日に 10 分間程度の時間をかけて丁寧な歯みがきをほぼ毎日行う者の割合（65 歳以上）は、表 11 のとおり、平成 26（2014）年度と令和 4（2022）年度では、ほぼ横ばいでした。

表11 1日に10分間程度の時間をかけて丁寧な歯みがきをほぼ毎日行う者の割合

年齢	平成 21 年度	平成 26 年度	令和 4 年度
65 歳以上	33.6%	34.6%	35.4%

資料：東京都「東京都歯科診療所患者調査」

- 週 1 回以上デンタルフロスや歯間ブラシを使用している者の割合は、表 12 のとおり、年々増加しており、令和 4（2022）年度では、7 割を超えていましたが、そのうち、「ほぼ毎日」が 49.0%、「週に 3 ~ 4 日」が 9.3%、「週に 1 ~ 2 日」が 12.8% という状況です。日

常にデンタルフロス等を使うことを習慣づけることが必要です。

表12 週1回以上デンタルフロスや歯間ブラシを使用している者の割合

年齢	平成11年度	平成16年度	平成21年度	平成26年度	令和4年度
65歳以上	34.5%	46.4%	57.1%	59.5%	71.1%

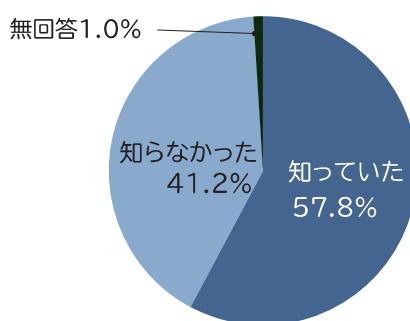
資料：東京都「東京都歯科診療所患者調査」



### ● 歯と口の健康と全身の健康に関する知識

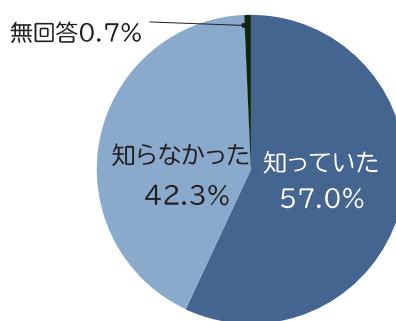
- 歯と口の健康と、全身の健康は密接に関わっており、フレイル予防のためには、口腔機能の維持・向上により日々の食事を通じて良好な栄養状態を保つことが必要です。
- 高齢期になると糖尿病患者の割合が高くなります。歯周病は糖尿病の合併症の1つであり、相互に影響し合うなど密接に関係しています。また、糖尿病と歯周病は生活習慣病であるため、その予防には毎日の食生活の見直しや口腔ケアの実施等による生活習慣の改善が効果的です。
- また、高齢者の死亡原因として肺炎が高い割合を占めており、その多くが誤嚥性肺炎です。口の中の清潔と口腔機能を維持することで、誤嚥性肺炎を予防することができます。
- 糖尿病と歯周病の関係を知っている者の割合及び口腔清潔と誤嚥性肺炎の関係を知っている者の割合は、図18及び図19のとおり、半数程度に留まっています。
- 自ら行う口腔ケアとともに、かかりつけ歯科医での口腔衛生管理を受け、口の中を清潔に保つことが、歯と口の健康だけでなく全身の健康に寄与することを啓発していくことが必要です。

図18 糖尿病と歯周病の関係を知っていると回答した者の割合(65歳以上)



資料：東京都「東京都歯科診療所患者調査」(令和4年度)

**図19 口腔清掃と誤嚥性肺炎の関係を知っていると回答した者の割合（65歳以上）**



資料：東京都「東京都歯科診療所患者調査」（令和4年度）

### ③取組の方向性

- 高齢期の歯や口の特徴を踏まえたむし歯（う蝕）や歯周病の予防に取り組みます。
- 加齢や疾病に伴う口腔機能の低下や誤嚥性肺炎のリスクを予防するため、口腔ケアの知識や義歯の適切な手入れ方法の普及啓発、定期的な歯科健診の必要性について周知し、生涯を通じて食事や会話を楽しむことができる歯と口の機能維持を支援します。
- 歯と口の健康と全身の健康の関係に関する知識について、都民の認知度を高める工夫をしていきます。
- いつまでも健康で過ごすために、日常的な口腔ケアや定期的な歯科健診の受診に加えて、口腔機能の維持・向上に向けた取組や適切な栄養摂取の必要性を啓発していきます。

### ④指標

項目	基準値	目標値
何でもかんで食べることができる者の割合（65歳～74歳）	78.1% (令和2年度)	増加
8020を達成した者の割合（75歳～84歳）	61.5% (令和4年度)	65.0%



## 2 かかりつけ歯科医での予防管理の定着・医科歯科連携の推進

### (1) かかりつけ歯科医

#### ① 現状と課題

- かかりつけ歯科医は、安全・安心な歯科保健医療サービスの提供を始め、都民の生涯にわたる歯と口の健康や全身の健康づくりへの支援や、地域の歯科保健の取組への協力、多職種連携への参画など、地域医療における重要な役割を担っています。
- かかりつけ歯科医は、都民ひとり一人のライフステージや口腔の状況に応じて、以下のような機能を果たします。
  - ▶ 定期的・継続的に口腔衛生管理を行う  
歯みがき指導や食生活・生活習慣などの保健指導、歯科健診、歯石除去・歯面清掃などの口腔清掃、フッ化物歯面塗布などの予防処置を行います。
  - ▶ 必要に応じて、口腔機能管理を行う  
むし歯（う蝕）や歯周病の治療、口腔機能の発達支援、義歯の調整、摂食機能療法などのリハビリテーションを行います。
  - ▶ 必要に応じて医療・介護などの仲介者として多職種と連携します。  
歯科大学附属病院や病院歯科※などへの紹介及び連携を行うとともに、手術等の際に医科と連携して周術期口腔機能管理を行います。また、地域包括ケアシステム※の一員として、在宅医療や介護を担う医師や看護師、ケアマネジャー※等の多職種と連携し、歯科保健医療サービスを提供します。
- 国は、歯科疾患の重症化予防に取り組むかかりつけ歯科医の機能を評価するため、平成28（2016）年度より、必要な施設基準を満たした医療機関から、かかりつけ歯科医機能強化型歯科診療所※の届出を受け付けています。かかりつけ歯科医機能強化型歯科診療所の届出医療機関数は、表13のとおり、令和5（2023）年4月現在、1,222件あります。
- 全てのライフステージを通じて歯と口の健康を維持していくとともに、日常的に都民が自ら口腔ケアに取り組み、かかりつけ歯科医を持って、定期的に保健指導や歯科健診、予防処置を受けることが必要です。
- 出生前の妊婦の歯科健診に始まり、高齢期に至るまでのライフステージやライフイベントによって、かかりつけ歯科医に求める機能は異なります。一人の歯科医師、1か所の歯科医療機関が生涯を通じて「かかりつけ」になるわけではなく、ライフステージが変わることに、あるいは引っ越しなどにより生活の場所が変わることに、かかりつけ歯科医は変わっていきますが、生涯を通じて、継続してかかりつけ歯科医を持つことが大切です。

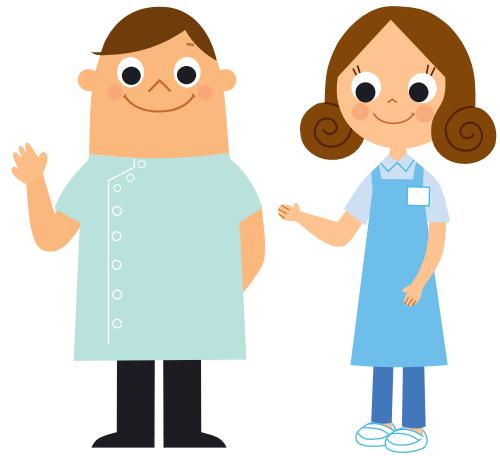


表13 かかりつけ歯科医機能強化型歯科診療所の届出医療機関数

項目	令和5年度
かかりつけ歯科医機能強化型歯科診療所の届出医療機関数	1,222件

資料：関東信越厚生局「保険医療機関・保険薬局の施設基準の届出受理状況及び  
保険外併用療養費医療機関一覧」

### ● 乳幼児期（0歳～5歳（就学前））

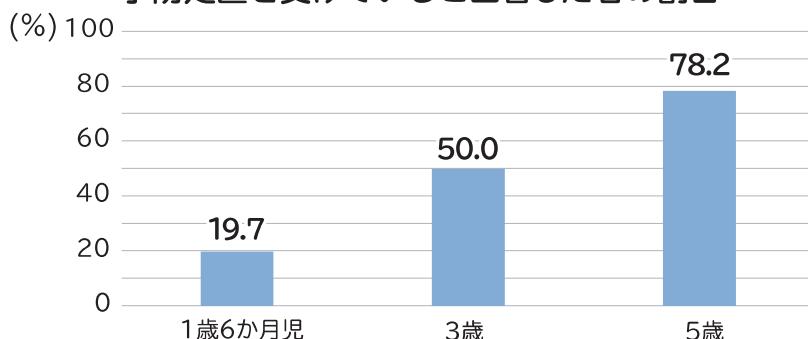
- かかりつけ歯科医を持っている者のうち「定期健診又は予防処置を受けている」と回答した者の割合は、図20のとおり、1歳6か月児で19.7%、3歳児で50.0%、5歳児で78.2%となっています。
- 乳幼児期から定期的な歯科健診とフッ化物歯面塗布やシーラントなどの予防処置を受け、また、噛み合わせや歯並びの相談などをすることができるかかりつけ歯科医を持つことは、生涯の歯と口の健康の維持につながります。
- 乳幼児期は、区市町村が実施する歯科健診時の保健指導等をきっかけとして、初めて歯科受診する傾向にあります。1歳6か月を過ぎたら、定期的にかかりつけ歯科医で歯科健診や予防処置を受ける習慣を身につけることが必要です。

表14 かかりつけ歯科医を持っていると回答した者の割合

年齢	平成11年度	平成16年度	平成21年度	平成26年度	令和4年度
1歳6か月	-	-	16.1%	19.1%	24.9%
3歳	29.7%	31.0%	44.9%	48.5%	52.4%
5歳	63.8%	68.5%	75.5%	76.8%	80.5%

資料：東京都「幼児期・学齢期歯科保健行動調査」

図20 かかりつけ歯科医で定期健診又はフッ化物塗布等の予防処置を受けていると回答した者の割合



資料：東京都「幼児期・学齢期の歯科保健行動に関する調査」（令和4年度）

## ● 学齢期（6歳～17歳）

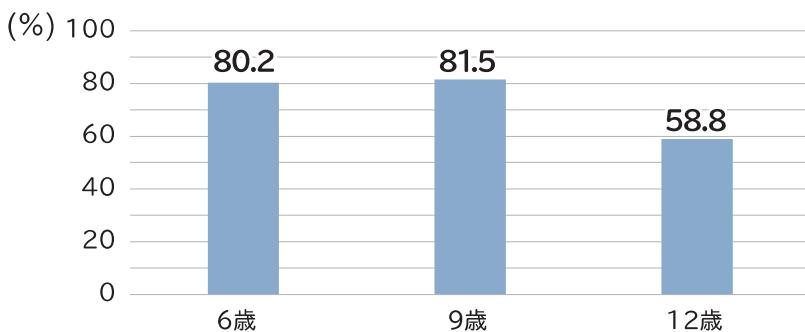
- 学齢期のむし歯（う蝕）や歯周病の予防には、乳幼児期と同様に、定期的な予防処置を受けることが有効です。6歳臼歯などに対するシーラントも効果的です。
- かかりつけ歯科医を持っている者のうち、「定期健診又は予防処置を受けている」と回答した者の割合は、図21のとおり、6歳が80.2%、9歳が81.5%、12歳が58.8%となっています。
- かかりつけ歯科医での定期的な予防処置や学校歯科医による定期健診、歯科保健指導等の多様な機会を通じてむし歯（う蝕）や歯周病にかかる原因と予防に関する理解を促し、学齢期に好ましい歯科保健行動を身につけていくことが必要です。

表15 かかりつけ歯科医を持っていると回答した者の割合

年齢	平成11年度	平成16年度	平成21年度	平成26年度	令和4年度
6歳	75.1%	76.5%	78.9%	81.2%	83.6%
9歳	69.4%	71.4%	79.5%	83.5%	84.6%
12歳	48.4%	48.4%	58.9%	57.6%	63.5%

資料：東京都「幼児期・学齢期の歯科保健行動に関する調査」

図21 かかりつけ歯科医で定期健診又はフッ化物塗布等の予防措置受けていると回答した者の割合



資料：東京都「幼児期・学齢期の歯科保健行動に関する調査」（令和4年度）

※6歳は保護者による回答、9歳及び12歳は本人による回答

## ● 成人期（18歳～64歳）

- 令和4（2022）年度に都が実施した青年期実態調査では、かかりつけ歯科医を決めていると回答した者の割合（18歳～30歳）は、表17のとおり、47.0%であり、そのうち、定期健診を受けていると回答した者の割合は、表18のとおり、69.7%となっています。
- また、同じ調査では、かかりつけ歯科医を決めない理由として、表19のとおり、「歯や口にトラブルがないから」が29.4%、「忙しくて受診する時間がないから」が27.9%、「どこに受診すれば良いかわからないから」が26.2%、「費用が負担に感じるから」が25.7%となっています。
- むし歯（う蝕）や歯周病は早期発見・早期治療も大切ですが、一度かかるとそれ以降の歯科疾患のリスクが高くなってしまうため、予防が欠かせません。また、歯周病の初期の

段階では自覚症状を伴わない場合も多いため、日常的な口腔ケアだけではなく、かかりつけ歯科医での定期的な歯科健診や予防処置（歯石除去・歯面清掃など）が重要です。

- 将来、2020を達成することができるよう、青年期から口腔ケアをしっかりと行い、かかりつけ歯科医での定期的な歯科健診や予防処置を受けることの大切さを啓発していく必要があります。
- 国では、令和4（2022）年の「経済財政運営と改革の基本方針（いわゆる骨太の方針）」に「生涯を通じた歯科健診（いわゆる国民皆歯科健診）の具体的な検討」が初めて盛り込まれるなど、生涯を通じて歯科健診を受診できる体制整備について検討が行われています。

表16 かかりつけ歯科医を持っていると回答した者の割合（20歳～64歳）

項目	平成26年度	令和4年度
かかりつけ歯科医を持っている者の割合	86.7%	88.9%
かかりつけ歯科医で定期健診、又は予防処置を受けている者の割合	58.0%	82.3%

資料：「東京都歯科診療所患者調査」（令和4年度保険外併用療養費医療機関一覧）

表17 かかりつけ歯科医を決めていると回答した者の割合

性	男性			女性			総数			
	年齢階級	18-25	26-30	総数	18-25	26-30	総数	18-25	26-30	総数
決めている者の割合		44.4%	43.2%	43.9%	50.2%	50.1%	50.2%	47.4%	46.6%	47.0%

資料：東京都「東京都青年期実態調査」（令和4年度）

表18 かかりつけ歯科医で定期健診を受けていると回答した者の割合

性	男性			女性			総数		
年齢階級	18-25	26-30	総数	18-25	26-30	総数	18-25	26-30	総数
定期健診	67.0%	62.4%	65.0%	72.3%	75.8%	73.8%	69.9%	69.5%	69.7%
歯石除去・歯面清掃	48.8%	58.4%	53.0%	52.3%	64.8%	57.6%	50.7%	61.8%	55.4%
歯磨き指導	16.2%	18.6%	17.2%	18.6%	15.2%	17.2%	17.5%	16.8%	17.2%
むし歯の治療	33.3%	39.8%	36.1%	35.4%	46.5%	40.1%	34.5%	43.4%	38.3%
歯周病の治療	6.1%	6.6%	6.3%	3.4%	8.6%	5.6%	4.6%	7.7%	5.9%
その他	4.0%	2.2%	3.3%	10.0%	4.7%	7.8%	7.3%	3.5%	5.7%

資料：東京都「東京都青年期実態調査」（令和4年度）

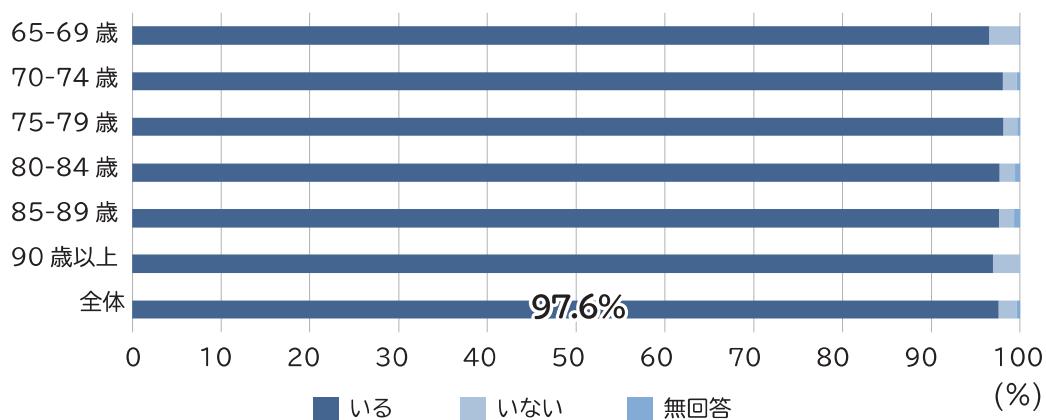
表19 かかりつけ歯科医を決めていない理由の割合

性	男性			女性			総数		
	年齢階級	18-25	26-30	総数	18-25	26-30	総数	18-25	26-30
歯や口にトラブルがないから	32.8%	28.6%	30.9%	24.8%	31.8%	27.7%	28.9%	30.1%	29.4%
忙しくて受診する時間がないから	28.2%	22.9%	25.9%	30.3%	29.8%	30.1%	29.2%	26.1%	27.9%
費用が負担に感じるから	23.4%	22.9%	23.2%	28.0%	29.4%	28.6%	25.6%	25.9%	25.7%
どこに受診すれば良いかわからないから	22.3%	24.9%	23.5%	29.7%	28.6%	29.2%	25.9%	26.6%	26.2%
職場等で健診の機会があるから	2.2%	3.4%	2.7%	0.9%	1.6%	1.2%	1.5%	2.5%	2.0%
行きたい歯科医院が見つからないから	13.2%	13.1%	13.2%	18.4%	27.5%	22.3%	15.7%	19.7%	17.5%
歯科医院が苦手だから	12.1%	13.1%	12.6%	19.0%	18.0%	18.6%	15.4%	15.4%	15.4%
かかりつけ歯科医を必要と思わないから	23.7%	25.3%	24.4%	16.1%	11.4%	14.1%	20.0%	18.8%	19.5%
その他	1.3%	1.0%	1.2%	2.9%	3.5%	3.2%	2.1%	2.2%	2.1%

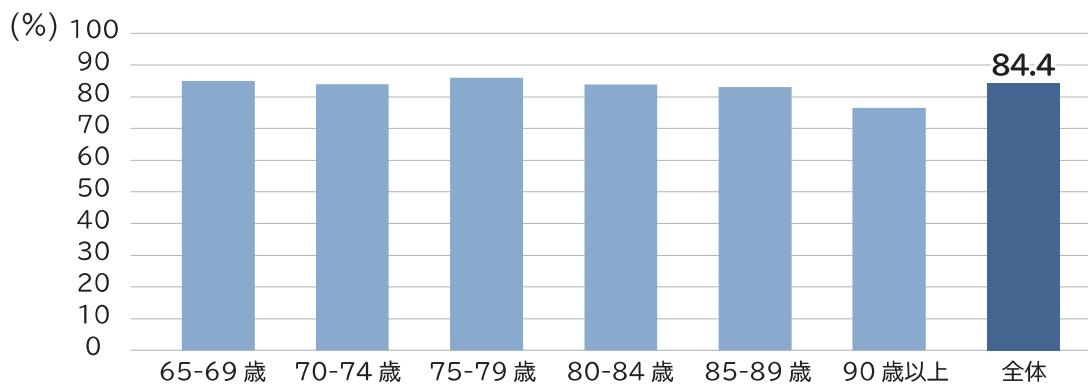
資料：東京都「東京都青年期実態調査」（令和4年度）

## ● 高齢期（65歳以上）

- 高齢期になっても、かかりつけ歯科医を定期的に受診し、むし歯（う蝕）や歯周病を早期に発見・治療することが重要です。また、根面う蝕の予防にフッ化物を応用することも有効です。
- 義歯の調整や口腔機能の維持のためにも、かかりつけ歯科医で口腔衛生管理や口腔機能管理を受けることが必要です。
- 「かかりつけ歯科医を持っている」と回答した者の割合は、図22のとおり、高齢期全体で97.6%となっています。また、「かかりつけ歯科医で定期健診又は予防処置を受けている」と回答した者の割合は、図23のとおり、全体で84.4%となっています。

**図22 かかりつけ歯科医を持っていると回答した者の割合**

資料：東京都「東京都歯科診療所患者調査」(令和4年度)

**図23 かかりつけ歯科医で定期健診又は予防処置を受けていると回答した者の割合(65歳以上)**

資料：東京都「東京都歯科診療所患者調査」(令和4年度)

## ② 取組の方向性

- 都民が、かかりつけ歯科医の機能を正しく理解し、生涯を通じて自ら口腔ケアに取り組むとともに、全てのライフステージを通じて、かかりつけ歯科医で定期的に歯科健診や予防処置を受けるよう、ライフコースアプローチに基づいた啓発を行っていきます。
- 特に、青年期に対しては、定期的な歯科健診や予防処置を受けることの重要性に関する普及啓発を更に強化していきます。

## (2) 医科歯科連携

### ① 現状と課題

- 糖尿病や喫煙、心疾患、脳梗塞、早産・低体重児出産など全身の健康は歯周病と深い関わりがあり、糖尿病などの疾患がある方の治療に、医科と歯科が連携して取り組むことが必要です。
- 口腔ケアが、誤嚥性肺炎の発症予防や周術期における口腔内合併症の予防・軽減につながるなど、口腔と全身との関係が明らかになっており、医科と歯科が連携して、肺炎予防や合併症予防に努めることが必要です。
- 周術期口腔機能管理において医科歯科連携を行っていると回答した歯科診療所の割合は、表20のとおり、令和4（2022）年度では31.4%となっており、身近な地域で周術期口腔機能管理に対応するかかりつけ歯科医を増やしていく必要があります。

表20 周術期口腔機能管理における医科歯科連携を行っていると回答した歯科診療所の割合

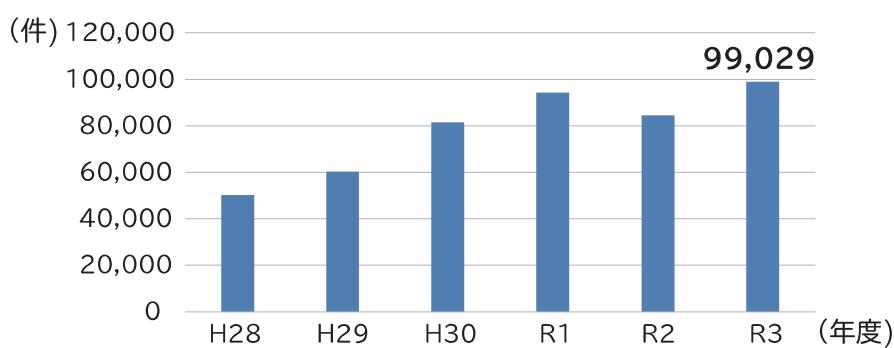
項目	平成28年度	令和4年度
周術期口腔機能管理における医科歯科連携を行っている歯科診療所の割合	21.8%	31.4%

資料：東京都「医療機能実態調査」

- 周術期口腔機能管理料の算定件数は、図24のとおり、令和3（2021）年度は99,029件であり、口腔機能管理を行う件数が増加しています。
- 周術期口腔機能管理を実施していない理由について、表21のとおり、「病院から紹介を受けたことがない」が51.8%、「連携の進め方が分からぬ」が40.6%であり、連携の推進に向けた取組を進めていく必要があります。
- 「周術期に口腔健康管理を行うことが手術中や手術後の肺炎等のリスクを軽減する効果があることを知らなかった」と回答した者は、図25のとおり、74.8%であり、歯科専門職や医療専門職だけでなく、都民への周知も必要です。
- 周術期の患者や糖尿病等の疾患がある方の治療に、医科と歯科が連携して取り組むとともに、医療職・介護職等の多職種と連携を図ることで、患者にとって適切な歯科保健医療サービスを提供することが必要です。
- 在宅療養や摂食嚥下※機能の支援についても、歯科専門職と多職種が連携して取り組む必要があります。



図24 周術期口腔機能管理料(Ⅰ)～(Ⅲ)の算定件数



資料：厚生労働省「NDB オープンデータ（医学管理等）」

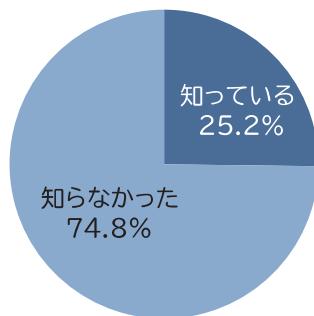


表21 周術期口腔機能管理における医科歯科連携を行っていない理由の割合

項目	平成28年度	令和4年度
病院から紹介を受けたことがない	-	51.8%
連携の進め方が分からぬ	69.3%	40.6%
連携をする必要がない	21.1%	11.7%
地域に連携できる医療施設がない	8.3%	7.4%
無回答	4.0%	2.9%

資料：東京都「東京都医療機能実態調査」

図25 周術期に口腔ケアを行うことが手術中・後の肺炎や感染のリスクを減らし、回復を助ける効果があることを知っていると回答した者の割合



資料：東京都「インターネット都政モニター調査」（令和4年度）

## ② 取組の方向性

- 糖尿病などの疾患がある方や在宅で療養している方の治療に医科と連携して取り組む歯科医療機関を増やし、医科歯科連携体制の充実を図っていきます。
- 周術期口腔機能管理に対応する歯科医師、歯科衛生士を育成するための研修会を開催するとともに、研修修了者の情報を活用して病院と歯科医療機関との連携をより一層推進します。
- がん治療等の口腔内合併症の予防や軽減を図るため、周術期における口腔健康管理の大切さについて、患者・家族の理解向上と都民への普及啓発に取り組みます。
- 在宅で療養している方の摂食嚥下機能を支えられるよう、歯科医師や歯科衛生士をはじめとする人材の育成や多職種連携によるチーム医療を進めていきます。

## (3) 指標

項目	基準値	目標値
かかりつけ歯科医で定期健診又は予防処置（フッ化物塗布等）を受けている者の割合（3歳児）	50.0% (令和4年度)	60.0%
かかりつけ歯科医で定期健診又は予防処置（フッ化物塗布等）を受けている者の割合（12歳）	58.8% (令和4年度)	65.0%
かかりつけ歯科医で定期健診又は予防処置（フッ化物塗布等）を受けている者の割合（18歳～30歳）	69.7% (令和4年度)	増加
かかりつけ歯科医機能強化型歯科診療所の届出医療機関数	1,222件 (令和5年度)	増加
周術期口腔機能管理料（Ⅰ）～（Ⅲ）の算定件数	99,029件 (令和3年度)	増加

